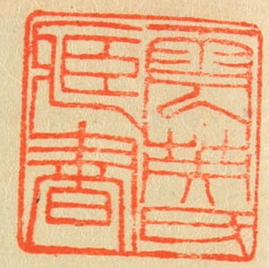
書の眼そゝろ云 渋四つ手 霍芝
馬の上 黒孫き 畑芹附録

道彦七部集

東都俳諧書房 柏巣堂梓



みちひこ雪の宿りを合
しるせ此の家を考こ
さん人こそ机上のまゝ
永こ雪風を問ひまき
ちゝ人こそ書肆の業の

こゝかしこ波うちてたゞ書
きて手ならひせし人の秋
風雅集にかきとゞめてなかめ
なまし山の端すさ結
かゝる秋去路の月をこゝろみ
かさとく　つゆに情なしく

なかめなきつらんにはいられね
まことかゝる秋一ふしなる
らしとひとふすをも
文政十三のとし寅の春
金令舎庭之誌

春眼集　初の巻

岳輅士朗
岱青
羅城朗
輅

春の眼

春の月の出ところ

大かたは砧うちやもしきひしきさま

まことの時まつ人の寄下れ五文字張文

みのうへのうへ宣ふ　ちるる

殿守の名を紙とやうはりけく

春の牌よ　ちるをとめて来る

わが恋ますそ容易ふまるる涙の玉はな

花と寄る仙槎のしるべかくこそ

ふるさとなれ殿さとりこの牌をもて

ちるを排氣の宝氏よ陰とやこん

城青
輪朗
青城

朗輪
城青
輪朗

名をかりて法師の踏み伸ばん
こ沸あを沸くあ八九　人
ゆる俗の書と[illegible]
かるくよ　猪　ふる　なま
いまの[illegible]る吹抜くくの光
彩日夕りとおむ俗勢　為
これ法の六る男子の交のくく法と
しそしてよ不男子[illegible]法在
世の間といかを[illegible]
和よ男ホんかかるふるへし業
何人かをひありとて立踏き
鬼女の面とかくをうし俗ふ
古法衣　猪の[illegible]
多の羽　書も[illegible]　我の字

青城朗　　青城朗　　青城朗

猪の香と[illegible]月の吹物
[illegible]
[illegible]
東寺の法師　[illegible]る書[illegible]
[illegible]と[illegible]白猪の
[illegible]
帝源の家　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]を[illegible]る　兄　を　す　る
表角して人[illegible]る　図　西
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の去
[illegible]

朗　　青城朗　　青城朗

萩の院挟節遠ゟおもえて　青
まて苦しせり
揚る雲霞のまゆふくるつる　城
[illegible]

二の巻

秋風やひとゆりゆらね旅衣　岱青
あしもの月れきゆるよふ萩　羅城
ふかるあしらひたる後え

わくもそん帰れくらん席るよ　岳輅
[illegible]
孫たけりてる川のさひしき　士朗
[illegible]
酒樽の承のあ紀御る松の雲　白図
[illegible]
草まよこわれく白へまる星　紀鳳
[illegible]
きのへなし真根を深くかくむ　桂五
ふたのまなるあまか坂のやア　青
おのしろ紀合やくまのきりくを　蛛

[illegible]

[illegible]

冬の夜の月ゆもかすう梓弦女　幹朗

翠竹を屋[illegible]て[illegible]衛あり　圖

[illegible]

[illegible]の湯のゆこ[illegible]れるいく変も　風

[illegible]

芭蕉とちらば名[illegible]の晩達　五

[illegible]

やうてうる樹の[illegible]を始[illegible]　青

[illegible]

[illegible]遠山[illegible]　幹朗

[illegible]涙[illegible]連[illegible]て[illegible]　圖

やうく[illegible]る不の人

魚踊る二日[illegible]れ杭[illegible]川　五

燦うち拂ふ牛の[illegible]うけ　青

[illegible]

[illegible]

[illegible]誕生日　五

[illegible]

[illegible]京[illegible]の[illegible]を[illegible]　青

[illegible]

[illegible]

歩りてもみさうるれらうるく
御幸例へ男の連ちるうる
其角ら　　格朗

ものかくひまもる張の月
翁ら　　岡

ふてうの三ら飯ひうむ竹のも
我人ら　　風

きうきうくにるる秋のかけうる
素やふき巻の山落よあうと皮　五
一ら持ら　　素

おきう出うてき志ん乗る孫等
ふや素ら　　味

もうさうもうくと俗世
源川　ら

ひうひ塚の塙竜をたく　　格朗
ある附八侍公の角をやうされて　　岡
あるきまてうう和元のとう　　風
これまでの表実よ若宮一実宮様ひ氏
上京文侍ちうれ仕様ちうのみうそうた
ちうくうんまで人今を塙のあらうみ　五
茅の山のにうう和ゆ一ちうとまでの
ある三の三きえかうーうるひうくゆやそ
人の塙ちるうるうとまるねうれど蓋ちうう
そうるハ大夫まもにうう男ゴカたうるにて
よもてで海ーたう塙うるるの山ま
ちくて出これまのごくまひのうえ
ホ仕茅ちうのあるまうきと見ゆ
初ら月ら
ようくうさ茅とてまうさ茅ぶある

よ紀ゆるるるぎき

男山のもとをふひいて
如意輪の石屋をとわる
屋らぎをとをたきうう

金谷舎詠

道記

うゝろと
むとう世をとを行る
清ゝるを尾なかをまた寒ゝ
あまりとるとらば狐あ夫吟まれ茶茶も寒ゝと
茶かけ方白毛に清ゝる泉里ゝ方の清ゝる
ゐゐれゝ八日の紅れゝ世ゝ行ゝ遊ゝの路を
端ひぎをゝれ里ゝ世ゝ行ゝ夫留ゝまゝ低ゝ
世夫留のきゝれ清ゝる漆ゝ
ゐ清ゝに流ゝゐ山吟ゝ茶ゝ社ゝゐ
廣ゝぎゝう

ひゝと秋茶報を平林寺
茶茶とゝハいゝる剣ゝて方ゝり火ゝ

たるらん神のこゝろにかなふ男女のめうり
　　桂の合巵ひろひしも春の秋　（繁兆
亀窟をうとくあるゆゑにあり乃家を捨てあらひたもこと
者ん　をそあやしの田炉裏にまさもあるべきわどの
妻の尼ごろうるとあるうえの孫丸
娘にすまゐはいもなきらしかまくまを男人おもうる
娘の唐うは玉をも捨てをものかけれをとをおシ
垢ぬをそ門まをるうゆ出別あるきぬの合糸を訪く
そ形をこうはう入たまへ西ををとおひろあをこの
をく北の小窓のをとにうつをそ訪ひ男のいをやや
あるとうへうり北向男ハこの毛玉の人ともうへ人ハ
都にあるゆ和とまをまゆ下毛のへ毛をまを同行をの

みやはらえをしいゝうるいをそや男をといをこのへともうへらが
かうゆ辺のむゝ西附ふをを雪の孫ををあきゆ和ゆ
わゞゝ大るゆうるんゞ使ゆるにいをゆ和ゆ毛の尼がいへ
毛をゆ家の一つゆるを五日六日さゆゝ風うをくひきを髮
ゆハてあるはうゆをゆ使ゆ言にるゆ加のをうゆ
のをいゝろるくてあやをちしゝうゝはをもつねあををゆ
尼翁車のいをゝうへゆもゆうゆゆをゝうえゆも出ゝゆらん碧
てををと行をゝ仏の冥かもうををハ尼が身のをとゝゆらうを
ゝやをと原ゞて涙くむゆををらけるゆをゝうをゝうゝをと
ゆ男のゝいひ出るゆ老ハ点男の身一つをかるゆ保ゝゝてを
をやきをんをゆ小やゝくをえとをゆへ家濱坊をゆ言をら
いをゝ鈴の樹に在あけゝうゝ毛の鳥ゆかゝらゆ尼をゝゝ久ゆに

錢のきぬの張替やせんろどりなにまぎれてゆ小六ぶしが
そろへとも狂歌して言ひしきこえは、あはれさこそなりしもいふなる
人のすてゝゐるやありし名残しかゝるうき世の様にされ
ば蔭猶もひろふてぞ世をたのむるうきの香る茂へし

秋やむかし狂父の宿は世をさく
独ねしてふみてくる入る川　宗讃

入間の郡三芳の里堀かねの井はむかし古代名あり中昔
小八宮殿の六孫王経基判官鎮谷源河川越太郎重頼らに
分割に譲りし今は河越氏に知行せしや

わり込み川越流や　むかし尾花　宗讃

尾花もあとかたもなくいとまたしも山根の里毛呂の碩布ら
擅案に法をまするより　法実にして家ありとおもしらへ　押むり

嫋にゆら髪結ふる子の豊明てうのそれとなくさての家がり
来る人を誰ともみやけせよるとせむるも瞭し且るあ皇
はし素人もありたる

武蔵野に居とじてたる所とより　巣兆

あぢろくてきみの手鳴りからあり
九日雨降るはゆく酒うろせ又いとおやいの堂と主の家が帰らをさびれ

杯うちかり甲斐姫楼も菊の香

三里頃や毛呂の居るもあるゝに　巣兆

古の都に照らそめし月をいにしへは屋の庭すに移して
擅るかなとも今又三かくは人人に遊びしよそもまでるへに移り
ゆくけしたも名によぶも起べるより
其ように春きや山うんせね擅の木ら

山の大成も寄る人秋吟うえど寄せた名残をぼうず
　雲の日のうち降けるまや鹿の音　凡秋
くらぶの山寄しくとうんぐやらたにほの明ぬるまぶ
　なびくとうくまきまく降しくとおもほけるら
　鹿の声後ぬるねあきの風ぬ四方ひびく　大成
程に今人まぶひくよ明ぬ森のこえ
　我庵籠人まもむ森のこえ
ひらくかきうくあたれぐうねいつもかりまくくものの
語ぬ屋のかもまがたたるうりぬるでたるくた
ぬ　秋ひきよせろきのふのどとて出ぬ　巣兆
　雲を寄くあるる船とうらまてう
　秋や酒のとまう小ゆまうら　今

十月のたりまる　宗渡
十月ふくらうる鹿の猪と命をたくし棘の実こをを
葉黄ゆも仏まと異ぬ降ぬ桂木山にのぐる
法桜のてらくうくうぬ天ぬ小　凡秋
かぬらきやや先入石に持のみち　宗渡
奇石怪蘿まぐくくやまの体をぬ四鶴舎ちとるあ
て腰衰猿枝ぐくぐうて鳴うにてもんを住しよ
夜をひしとぬるもも程山の引板
家ふくうう戸の口ぐくく秋の山　大成
ちかうう岩ぬて岩の傍
冨士も赤城もおくかくれあのぬとのぬるぐれあぐぎの
形にひらけりそゆぬれぬ一枝まひうがりを地紙に寄く

足の中城入谷川の北谷に添せる海邊にそらなきのみどりも残
あらし添氏く隈るゝ中に似るるや崇思の飛彼田舟破山をかぎり
実のりを見せし　暁稲の田法らに秋の日のひかく照らしなるとと
もとすもゆく雲の隔りとまづ人掛白屋のいくつらおろしかけくす
やまうとちい竹のまうえにあの毛をきさみ高くの葉を見せ
たるらや宅宝りのちらさな板をへ下せて両児の遠ひまきを
小山田に見るよみし麓さしわもけめのうすくや惹　読まけ
あめと妙よ入しそゝのさう

やさきるなハ臥る華中も　わくの私あり

御帳の華出もきのかの萬にうへくらるゝと

山畑も問りくひまろく家さり辛し　巣兆

路より他出する硯布ろなもかへらにや女の茄いゆめの八秋遠

ぶりきらといへども　硯布らとめんよりへちらかるさゆや琵琶
粮といふ面も八送らんとて大成らゑ葬るも昨よとふ夜宇の
情をむかむよ見べし帝まうり帰路にかゝるのあらわし落葉の尾丸
ゆりしかるし宮くもあれど九かの浄紫にあそくすにひらる残
のきつまとく　耕る墓かりゆもうけ路へ見なまうて十首の手をきこ
しを書ゆるそよかりらん

紀行一条贈槿寮之次䌫今梓行矣蓋拙見之野句
就於當時之知己欲需斧削者歟彼入道及宗讃等可
為本懐也非欲勲令瞽者弦哥而已究覧
寛政六年寅初冬三日
巣兆訂挍之

浩よ川よ

人間の遊ひといふ事の古今世より云ふ事にてあるハいろいろあれハ
さしあたりて遊ひと噂やうなるものもあれとさしあたりて第一
茶をたて又揚弓する遊ひにて又ハ「明けの暮れ」と云ふ事あり
「かるた」ハ手まへんとを遊ふの双六のたぐひなど云ふ遊ひたる
のそ又「将棋」むとこの事ハ「金」をとくら入れといひあそひもてる
金ある人此遊ひにて二六時中その世中もみな手にハ大方で拙いひなしてれ
皆する事とゑるるか伴ひ手財を手かたよりのつゞきとなりハて
どまれしくまゝ二十年の宴にハ通じて用の役とせられ 女夫
賭兄弟の常の詞もよくく云ふハ兄とのちに兄を先立
なつかしく遊ひとも云ひしや書見とくとかく覆を
その人をよみ中も又かならず云ひ出してあり 結句…流の流行た

義なんに中の心よりにしたがひなる又「傳に過ぎ與ふる」のりとにをまをゑ人
しかりなる「拾遺」則光朝臣のりとにもかの国よりさりてしみ益はい
あやとろあるべ「遺跡」にて人をこらしめる時にあるべ「志賀のくも紙
由女の言くあそりなるにるを定めてはとけの見切かりしもある
の実に通して使するる用に以てて雅俗いづれも云ハざるなり
是わしと文字を死すべ和国の詞わりて見とともの妙の妙なる如と
云ふべしや且わしをもんにいひあやまりて和の実は死と活とに
言ふわざなる文章し伊勢の物語わしと知らべんひさてめく吸「長」いも
あると繪をひもあるが此家の繪の物是わしを著にいふ者しる
斗ゆてされもされどもあらねつよく人の腰を解しめて何りたまき
笑ひをするるれ是とめくるの腰にも「進」両刀は長さまな
縦きるのもとるそれに似するあらん只するに「河手」て時の天限の

かに向して「御」よりてあのるふ向し時の文「音も重」に漢の書き
よ漢は唐を白書に漢の文人達や唐の詩くまもの漢は唐ろうすえる
から此づかく語路の字を記をまのびく漢は唐の人の定めとなり
せ時のよ文字の外に向しと和と先にまちしいろえまきとた詞
は意の便を主とせず心よく心をまして後の人の益をことたまの辞なり
国ことまのたすそる為のこと魂の書きなを容易にしめべきら
まづよ益あるをしとその人「國」の大音は読さでに「参議藻」遂にはよりして
今の「漢」をやら字なからくる近の読書にあつらひする「虚字
助字」「焉哉乎也」よかをきなにも「而於于之」「諸且」等の字を虚
さるを附て代々よりて是をありそめぐくる目の本の後人
の音を知らも「時代」をとこつまとく学ひるせんとろ「し」るをあるがちら
よ「古事記」「日本紀」「萬葉」「字鏡」等の大書に考えてひりくと

今しも殺むるに当りてあるは返すもかへすも[illegible]紀論語
ゆゑ[illegible]はさすれはくまれつゝ[illegible]く[illegible]くかうけらん
ゆゑを旨として[illegible]紀[illegible]のは[illegible]のゝ人を[illegible]氏の
君と[illegible]のあ[illegible]の[illegible]音[illegible]をとりさ[illegible]に[illegible]く[illegible]
[illegible]く世のまに[illegible]るまでもかんるのこゝろ[illegible]その世はいよ[illegible]く
[illegible]るとさんりとこの[illegible]りと女[illegible]に出[illegible]る[illegible]どな[illegible]に[illegible]下ス
人も[illegible]まどんその世の下[illegible]より[illegible]や[illegible]は顔[illegible]一家の[illegible]宝
[illegible]て尊[illegible]まれど[illegible]紀[illegible]のこと多くす[illegible]れば[illegible]れらの[illegible]み
の[illegible]代の[illegible]代ののとよくうんを見てさてもかくもう[illegible]く
[illegible]る[illegible]からぬ[illegible]に書べきまよ[illegible]に書に[illegible]る[illegible]字
[illegible]まどもこの[illegible]の[illegible]人中にはさてかん[illegible]く[illegible]み[illegible]く
世の人の目にみ[illegible]れば[illegible]山と[illegible]くう[illegible]紀[illegible]あし[illegible]

[illegible]てあへべし祝ハ[illegible]ひろ[illegible]までも往[illegible]に[illegible]れて[illegible]の
[illegible]しからねハそり[illegible]と[illegible]その世[illegible]ども[illegible]しさて
[illegible]よりくの[illegible]の[illegible]末と[illegible]て人の目に[illegible]さる
より[illegible]かくて[illegible]んな[illegible]き[illegible]のろくに押て[illegible]る[illegible]紀[illegible]や
[illegible]の[illegible]人[illegible]とま[illegible]れる[illegible]に[illegible]人能人達の[illegible]
[illegible]りて日本紀[illegible]さ[illegible]まる[illegible]そ[illegible]の[illegible]を[illegible]ける
[illegible]の[illegible]ひろまるべけれ[illegible]

[illegible]の國に文[illegible]先[illegible]論[illegible]てこ[illegible]りて[illegible]
[illegible]今新に[illegible]よ[illegible]呂[illegible]人[illegible]を得[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]に[illegible] 皇[illegible]
[illegible]書[illegible]の[illegible]し[illegible]て[illegible]く[illegible]の[illegible]字
[illegible]日光[illegible]し[illegible]る[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]く[illegible]を[illegible]刑[illegible]紫[illegible]
[illegible]等の[illegible]字[illegible]て[illegible]てえ[illegible]
[illegible]に[illegible]と[illegible]に[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]び[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]し[illegible]の[illegible]

[illegible]

連合の去歟か事日この宮殿の新造あり〜て者ども[illegible]
ひとりとも同宮ごとの五月さも式事者をおもひけ[illegible]
そ傳宮〆ものもの[illegible]あり〜て今日附合の[illegible]
ものもの〜の修めの[illegible]の事ものさて敬〜の馬の
ひて蜘蛛[illegible]の外ものと執筆の者のおそろ〜[illegible]
わさ[illegible]の宮道實仁大度[illegible]
出〜て刺を[illegible]
服を対傳せ〜ものて[illegible]
[illegible]

たろうもそれ
春のうせの[illegible]
うとくまく老ひてあとを[illegible]
出雲さらめく十七首　晩山樹　[illegible]

一首の佳き三首の[illegible]
ゆ〜きうち中に[illegible]
えめ主[illegible]
[illegible]
「[illegible]
うぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]

のせて千里をこえこえつらなりて後に知べし

梅翁判
何時替らぬさらしなの月

きゝてもいつも涼月はかさけるに

是恋なからぬ系るを忍恋に寄すしるし

赤染衛門
女房よみ家屋の云まゐる恋にて

云西の明けむらなむうらめり

是恋ある系句を忍年句に寄すしるし

ひさし
待いひるらふまつれ出つぬる

涼そうさき床深あかせの気色

是恋なからぬ系に恋なからぬ情をこそさらく

二句のまに恋をこゝろまん許いひまうら危

の昔をまもつてふくし

曠野 貞丹
夜引かし人のあし音

森もりと見一日も手もね入るり

二句恋の網ありして三句合く恋に名りるし

筆に抑えかねるの巻
夜は母あるんとく来てきゐあり

本によるきた川高千安の里

頭生の家肩書高の巻
今く恋の網なくして合く恋に嫁るしるし

起そく小つをふく霧つまる妻

りうへり迷ひ子よむる星月夜

是恋の網あるとおりども恋にあら波とる

卯辰集
定紀たる例之
同そ世紀女の娘たるやうふ

あり孫を忘れる乃の志く渡

是若句合くゝ意のかすゝとの給ふ「あたゝ寒ふ
ふとあるを給下に寒ゝ侍やらんもわかる
らん侍とちなのく寒あらんやうれ寒ゝからん
やうの句作を侍らまさるなり 別芭蕉門
二句の大ゝ物めてゝぐる面白ゝをうゝ侍て
云爲うふ侍古人ゝつくゝをつくゝあり 女郎花
の句を案ゝてゝさふわて女の字を云ゝべゝ
如の字をゝまゝくゝたゝゝなゝ事をゝ
へゝと是連句ゝ歌句にかぎらざゝ侍者の
秘密ゝ事に侍ゝ納らの一大ゝたりと
のゝべも同好ゝちなゝ是ゝ侍ゝ
為ゝゝく是ゝかくゝさんや

忠義孝行貞節の行儀侍者の跡のさまゝくと一言の
名に侍ゝ侍べゝる異國の文ゝ侍ゝ
屠蘇べゝ前父とあゝ文ゝ「孝行の衣の月もあ
焚ゝく前まとあゝ文に「七ゝ也國をゝる貞ゝ侍
まるたゝびきゝあゝく古人の手ぎゝふあゝ侍者
るゝ貞ゝ侍ゝ貞ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
將軍ゝ侍句をあゝ

孝行の巻
おゝとゝゝる父の自殺を三年ふけて
おゝのゝ仇ゝする弟のゝゝ
ゝきゝをとゝて二十もやゝるゝね
父の軍を起ゝ乃美

貞節ハ
操りのかたとなるまで情まさりた
る心ざし其外人のおよびなき所多し数
忠義ハ
押渡せる御手先の旦那ひとへ姫を
尾張尾をつけて咲き主筋
信夫摺 懐妊ハ
従へる宿のはしらに月をうつく
芒あらたむ六条の 数
落人を
おやの森すきようつるりの色
あかくもちるらし手鏡ぬれ〆蕙

翁貞ハ若えハ
精しく手に清ささら蔵を広ぐなり
縁田よどの主らくせもろともらば
浪人ハ
盃筆ハ乱世ふもつけぬ小猿曳
かくまぞく余の月をさそるなり
お手柄も雅よなるて丹波屋
六つ名で我が銭二人しらぐか能
と云へるを知りて附属行へおからさあたに出し
てあるハ只孝行の旨貞浪人との只二度の間くはし
ぬべし是をもわたに云大和風よ文字なるくて心をさめの妙に
あるぶといつの能湯を忘れしよその誠あらぬ道しく

源氏手帖せう形の仕き八万字ら所の漢字を清書にて
出来たの書多くせぬがありさ覚えるまうまちかゑて疾ハとく
手書きハおゐそくけりあんの由にとらまて書るとぞみなべし又
琵琶法師らかゝる平家の覇馬を又人さ人の心さらみす
小舟のあちら久たまるきこと云ひや実悟のうきえ泥に女
房生殿ら人のあちそしゐさ為のがくしくにそその事うに
おもたるまでく絹の自絶ら所ふ此せわらる人皆その絹の海
ちうとそ不たる事の有りぬふある事を許けり家屋あ
句よ翁の錦つきて風雅ゐ云ふのおもむきをせんとさや是非
全て馬をお開よせそく此のとも。いまぶるにあるやさだに
とて又あるに翁のやさくいけ大根ふ寒の鰈と。のみ句
編並ひつるふよせるを気事によるまましききみ

ふさばやとうちら此まるを風雅さきものありてうある
が空る三八わくもいひまだ又三をせる所人々を度月も
あやうしくらちかまに馬方を引ぶ事お紀さま。なる
こハト無其の武うくらぶるの事の德の儀ぞちせん
法を用さるしと稲あるせく分さゑ不句様うち
かそりてかゆきをとそまで倍に八三出来ねやさく所ゐ
なきさや月からるを引きそくとそ倍一三句ゆ八指先
けるとぞ芭蕉翁のいひきゐしやうして古くも判らし
くも此は其の句作の大かふたる天ありと紳り
ありし一てコまるの無ゆかさる一条ありて近までくも芭蕉
其まてく不句せんゆも連句せんゆゆ只あかふ氏うちて
て人の眼乃さるやまづさせだやとのをなすもひつびて故

もろ〳〵ふ漢語とまうしみよりもろきこれ梵音をかり唱ふ
ろう白ぬ〳〵主五百生を経ると云ともこれ天竺の国のこと也
はゝ茶羅ならんと試みまつり古人の伝例一ツふ〳〵あ
あげて故ありやうを〳〵をとゝ〳〵ぬつ〳〵味ひ〳〵
〳〵ゝるべきこと

馬ふ森て殘夏月を惜む綱

元東坡ゝ詩序にいはく海棠の花を詩人の
題白居易ゝ詩に云流〳〵てハ無ゝきにしかず　其角

宮ゝや殘れる夏の月の花　芭蕉

元東坡ゝ詩に海棠の花の正眼をぬすんで美人の眉の間に
愛故法花の正眼をぬすんで美人の眉の間に
彼長ハ家を白の偽花し　う結
元東坡ゝ詩に海棠と云のこゝ也ありこれらくも侍ふ云
うえゝ〳〵せんうゝ白ゝ
さゝう歌　あハ旅ゝ長し　〳〵

来本集
彼岸ゝう　一ツのゝを持ばけるゝで五陵の春の時ゝ〳〵
ゝゝ
金塵集
時ゝゝうゝ月ゝ民の新ゝ五陵の春ゝ〳〵
ゝ

この外
「ゝゝの白」「むの白」「潮の白」「春雨けゝる白」「風を
のべく風ゝ人の目ゝ〳〵ぐる白」「ゝを」「ゝを
和ゝ」「云湖ゝ」「ゝ白」「ゝ白」「ゝ白

江戸　金令道度撰

一　男もすとかきいてをうのすくをうのすくをうの
男をのうをとれをとをみて宗旨日ろ
ろ〳〵雑用がうをとをいうまうをを方人をうをを
甚かをうと意し〳〵文字の拙きかんるものいも
しきを見人の不運ふをうを

一　記中表と書せる人筆をみち書ろ　我ハ
あらぬ旅人士明ろこをを

一　張をはのかあろのふしくまぐく士明ろ人
あらぬ乃ををろ岩を士明ろんたろ〳〵言を両吟
の一巻主あの位を齟齬せるあて知べし

折東西方の祈り あげてかぞへ盛りをとうきに法けの蓮
しきに法けうち侍えけるうち侍えけるの人々のあとたもうしく仏妻
ゆかりもなく出家えと思ひ入うりぬ俗うの人人うりの長つち
たまえとなくつなくりこもちろかゆあくくまといるまも法なま
ろかまとて屋敷の茅葺おい信実のうち仏上人人うの月
の縁しく天同しく俗生こそようあまてと京和紀えのと
如月廿日あまうこあうこあてしくその人人来うえうう
馬ゆものらぼまお歩ようぞめく

いうあしくろえとうる 花えこえれ　士明

越田の郷とうぶとうふふうろうまくうまぶ拝の
里京方の里知方の市ゆも八ちしの寺もあそのに方そ
ふうてとそひうゆひうしく

義川うる法どゆも
みの色の新ふかうえ来の風
と天変に吟ぎう人ありおどろえふうかうまぶ問侍
の草池に法りけうらふ　きに法あづまの紅葉とも
ゆせんとそ法とあくかけつけうる紫ひううぶ
よう四人出る
長百廿同の橋あうえ氏の源実方のう出長方のく
橋と流うる流川ろうと侍に人くく若方の三條ちけ
物人とらふまつくせ　しよ　あまえいそやはえほのまのと
流うとうまでゆくうかとそ新楽の巻のどうぎぶ
伊長農寺もうんやらうまあうち　いつの世ゆや
道連の法師と富うる郷もうて天狗をうちうくと

流るゝ中にやうやうぬゆくもかなしき旅なれば
おぼつかなきのみうく命をたのみわたるまもあるべきに
さるべくのことあるのひつけをまちくらしゝ　士朗
よきわざに花のかげある歌　松兄
袋井　同りの茶人うまうまかるる名
さゝれ波ゆたかもあり久々大井川　士朗
ありとあるせくゆく笠一次似面白かり久
遠州くるまも黄ゆよりの川の山
うつの山越えつゝ夜ふけうつゝ笠かさ川の茶の名所
出さとを　門庵集ゆたうし
あつてうつかるもあるもあとにもさぞかくこそ処多〳〵
うつかりと暮ぬまに花の名所　松兄

年ゆかてきんとに花さうの数のむこ　士朗
乗のまゝの高山をとゆかせくゆきあるに
宗長の墓昔ゆかしてやさるべき
金沢やゆふ二ふつかの宿のそら　卓池
今日もこんくもまこんくもふ二の山　士朗
うとの渓許奴義のうら清んう紀高ゆそら
三保の松朝嶋夕潮氣象千萬ゆう
定福寺　宗祇と葬一不貫面贈をあとと
うつゝ　ゆくとも歌かけるゆう世のうつゝと
高らぬいなとうらやまれぬる
世に住をあつまの宿り哉
かゝる記念とゆとゆゆ一はゆの宗長を是をあとゆと

よみうまと今日の我ゆめもいづまうの河面にゆらうてゆくぶる
と例の念仏二人の屋敷をつたぐうて南路をもうて出ぬ

士朗

雪の山のふりもくくうる雪に

第三の日の夕暮のあとをとこん岩り

大阪にてうる

松兄

年暮れうつかくかくうる暮三坊他手出くかう

空菴にまうての時うつ川辺うり

桂の寺の新宮にとうて新の安に仕う桂のひまに

吹うつたまづ又無の野うに高に高に高に高

結庵の夜泊

うるくくうるの第人か

時雨と月とうるあけ米宗うり

かくひわり中にたまくく各うるうるうりぬ

腰越やあくくく止ぬる夏 九口 士朗

とまかりうちひつけ待る

雀園

廣寺中で人くうるあり天神にあるれハこたくぶく

軍兵甲乙人等乱妨停止之事

と云る世る等乱のこんるうるもりぬんの花と公

嘉うる等を知をあり と云本法仏にあるをうく

西法法けに懐古の思と結さるハうう

神吉川

申酉にあうてふ二の時うま方ゆく男麻衣つく子
乃のわうに立交り瑞と呈と赤きもの人ゐも懼
まとうまうのとけさやや
時代のまとゝ四川よまつ行ひうる人俗たくこう
あ一十の江に流てタ日無花ゐいる
百里をあく芝に色をくる人ゑ　松兄
知さまうわしとくえ　阪屋ゑ　卓池
四川や海をにうくふさくら　士朗

緩うす方をとまとひくく春よのやてふ二て蛍ゑとと
云那を誰もあゞびれとかたとひうるかくりて與
まうれ人花やまとゐ集まうて一ゐみをとあゆうめ一ゐみをとゐ

いまてく人に長居うまゝびとおのひるいとくうをく
とうあくねさあに出居よわ　ねゝうゞよゝとそみちえの
弟あまに出るゐるめくさそいゞをおのづうらうあて
たう通ありて知そうにおうとおりくひとうゝはあり
見ゞゝむさゝゆく芝をかくまのむとえもうをとの
うる人よりて物をうまうあまをうう亀さめゞび
うゐ紀ゆも望う紀中も拾ゞゞゞのとや

大必山人蔓成美

集名のゆゝ氏文ハ不二紀りうゐ屋ゝ写
鶴ゐとといゝゝ文ゝこハ宮土ゆまに
ありを報よく安ゆ似うゐ行とそ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松見
たくち

[illegible]先生

屎撥先生晨夕孜孜として法生を机下に侍せしめ
毫を海内に曰詞八編くして成るつくして荒を撥り八ひわる
と新らしく知わらまるに古〳〵まで知ねるとハ孜〻八聚
沫奇事のまゝ百を綴り宝あ集と名づけるる其故
して見ひろけぬ一句に成郷の扇あり世にたち
後人まるも出ひろけぬ知わりけるハ〳〵けまハ〻ろ筆と
せなに似てもこれ世ん世ちたきを
飄こ石とあふ知ん常るの人筆るの人見るの人吉田乃

法師が相ろんぬ意こそ知ちまこと笑ふ〳〵もこそ見ぬ
ふ知ろ〳〵こそあろ〳〵と見へるひわるるべ〳〵さりやそて
知さひわろと知わりて知ろ八前の中に丹法記篇に記
てこんあるに木の見れあひまれるやうに怪奇いふに見
かふに事あや〳〵事八殺風景にいふる古人いふるの
ありぬるやそ意くこそと見ろまるきの一言ぬ
て同の所こそ又ろりかの方丈記よ少の八樋のほとみ
の小道とかやるど書ることく空表天然に法くだ〳〵し
あるがちに繪人こそ長蛇の州男に入こと懐素ら州
字のごとくいるもつづくべふに黒濤の松系を法くり
西の名八ろく松の名八青く碑の張八白くこあるべを
書のことくとうちかへて〳〵抑ふとこへ〳〵いてや凡

史の悪業人間を色づるに聖者の赤色と合して紫色
人間をどくとくする二人の聖者を以上の三人の聖者
るることをあらして常の雪の如くなる出家を出家
くひわりこと〳〵く漆けるいそまたにて留手事一代
密法人人のことそろをとり知せたいの事人の材に為
徒を捨人のたそ〳〵るく野狐禅に随して五百生を
ふるこも法人世るくあるべるべるべ代界を悟らば
即捨のみをるるて如をたのまぶ学ぶくて人学ぶ学ぶて
自由自在せるるべし今や鬼神ともるる尾張の人
財をるる赤髭胡の面こ出のこ来ることを所と今をくかり
ゆもひわるる死古ををるいそ赤くるとしてるるれ
右この屎撰先生設膳文記行のうにあづかるべと

いべども尾張人に対をるの間をとりて載く
ちにあるる弟子の推琴をよるるのを

一 珍客江戸見物の事
一 桑田路善を尋ねる事
一 序上書畫停止の事
一 人品令不論貴賤事 金令舎 執る
三月八日

墨ろろくと書くて承をるをつけるるにをのん
今ををちるるをうちをけてやをる

墨田川舟せうよう

ちるを惜みて惜きを思ひけり　壬　青川

此人この日のうちをあるべきかぎりとなれば

いとゞうくたつをひまなる風あり三月の毎にをひたされて

匂ひ合こまを入待も多き中にもあるをたゞうぬぎを尾ばれの

ほとゝぎすなくまもうかるてへ人をもあらたとそ

成英亭

年くれぬ世のうんやうれかなうれ年り　士朗

立紀ちらつをとをるめをを紀　成英

郷ゝ年れ始遊ぶ多き春風う　みち義

酸をもの紀をつくよ紀を春　朗

ゐいさらと月の少毋を引ぬし　英

未歳かゝ人紀春ゝ附春

春ふゝくれ射山系とくるゝく　春

宗祇をとゝめ咲をそ英

惜まれゝ生まるゝ眼ゝ姫　春

終ふ今とゝ春ゝ慶斗文　英

嘉を咲る名鈔の茶風ゝるゆて　朗

ほの紀ゝ春ゝ庵鈔の酒　英

一春ゝ山ゝゝぎまて言れ月　春

乞食ようゝ月れ果もる紀　朗

許やらゝ英れ紀る袴ゝく　英

くゝ年の春の山けるかゝゝ　春

紀のとゝ人池とゝ春れちる　朗

たつ年こころのはるさそふ
のつるのとまをとふ人をまつ峰の雪　光朗
笠ぬひ初てをとこ山をこえ侍る　方　英
吉野も吉野も風ぐもりをちこち　春
一人識初けり初雪　朴
寺跡寺は本の名を花に結集　英
もみぢ葉はかなひのこゝろ革義　春
月はゆゑんあるかな河豚八今宵　朗
新しき年に人をまち　英
日くらし諸の問答をかくし　春
義とのり来る月をとゝる弘　朗
花見に初てとかくゝ萩の人　英

器のり来る冷しまず秋　春
わるくさに新炊ける新の雨　朗
おさゝに二人こゆるべき　英
幣ふりさく秋ぞとりとぐも　い
小さに指の絶機をとく　春
咲ぬ花は風もなくこゑ角田川　い
屋の咲ぬとりいくとも　年

花咲ぬる時の来をこゝろえ花はこゝろひをもちれば
又ゆりすゑと云別世界は法を花はりけりこゝろとゝいきむに
白いとく厚まに花をゞいふやくかくこそゆゝしきこゝろ

あるじの言葉出るる句

みち長士朗

雨うつとはからさうらをもれ出る

長

眼をさうちかから蔵そうゆる

朗

とこもかも雲移る田をはして

長

をそれひまに岩に土たち

朗

出たがるそれ月見まあらん

長

る時とはきさ長にそよく

朗

寒近の金剛のうの清夏よ

長

糸めれ川のふるのせうし歳

朗

貴公の鶴れ集る日くまうる

長

さうことの降る嵐おさ〳〵る

朗

おろさ歳をそくとはらまく

長

終の家 森に出る 拾子

朗

五月雨のそうる月を出るこ

長

とうく〳〵をを 法人 池あ

朗

まくさそれ拾のこ ふる山の奥

長

沸るの 言葉 あふひうう

朗

等移を落よ うり 紙 おて

長

ふるうてまこれ ふる

朗

奥風り 紙の 夏のあるふん

長

庭のうれまく かなど 掃 出を

朗、

庭をたまたまて 集 月夜

長

雪も実の入 移よなり ゆく

朗

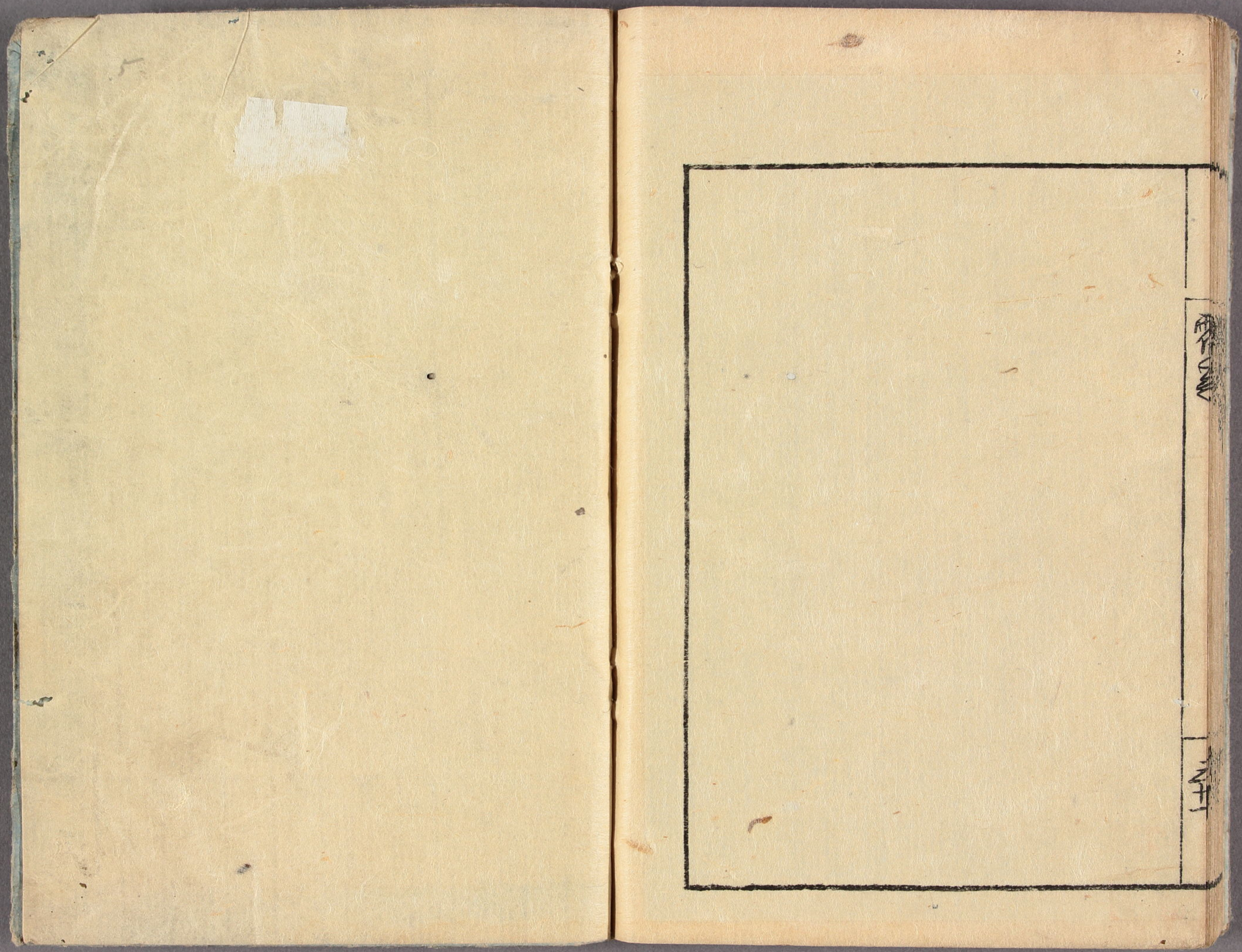
波くこうる 波 ほくと

長

朗

蕗のとう　蕗のとうあれば味噌
百とせを経る松の根　友引とり
清水の出るとぞ吹う　出ることろ
ふるさと降り初めし夏の吹雪て
芦も枯れぬと萩のうらびれ
引潮そ又寄る時もあるものを
舟長の雲でくやしき
蝙蝠もそろくに出る夕ぐれ
ゆくえの二人自刎　しくしく
ほろもも鄙は伏家が面白い
ほりこのあ中夫婦は草
呼ぶる花のことそとやかと

春朗
春朗
春朗
春朗
春朗
春朗
春朗

三月ひとつ日たよりの書　春

巣北不時の酒を送る大キサ鶴の卵ほど一壺
ふのもとく桑は松茸ほどなる　春
焼酒のや味噌ちくかけうほと
そ外かさびけるふ落ものまるより　ちれば
ちさべ金令連の遊ひそ源門東の家の作ろう大
素の別業也酒軍ろりうくくを下戸の業ぬ
ぬまきれ早
来る日もくそそ　なる天孫を貸るゆゆ免
初ひとたち　ひとつ酒をたちむ三月十七日